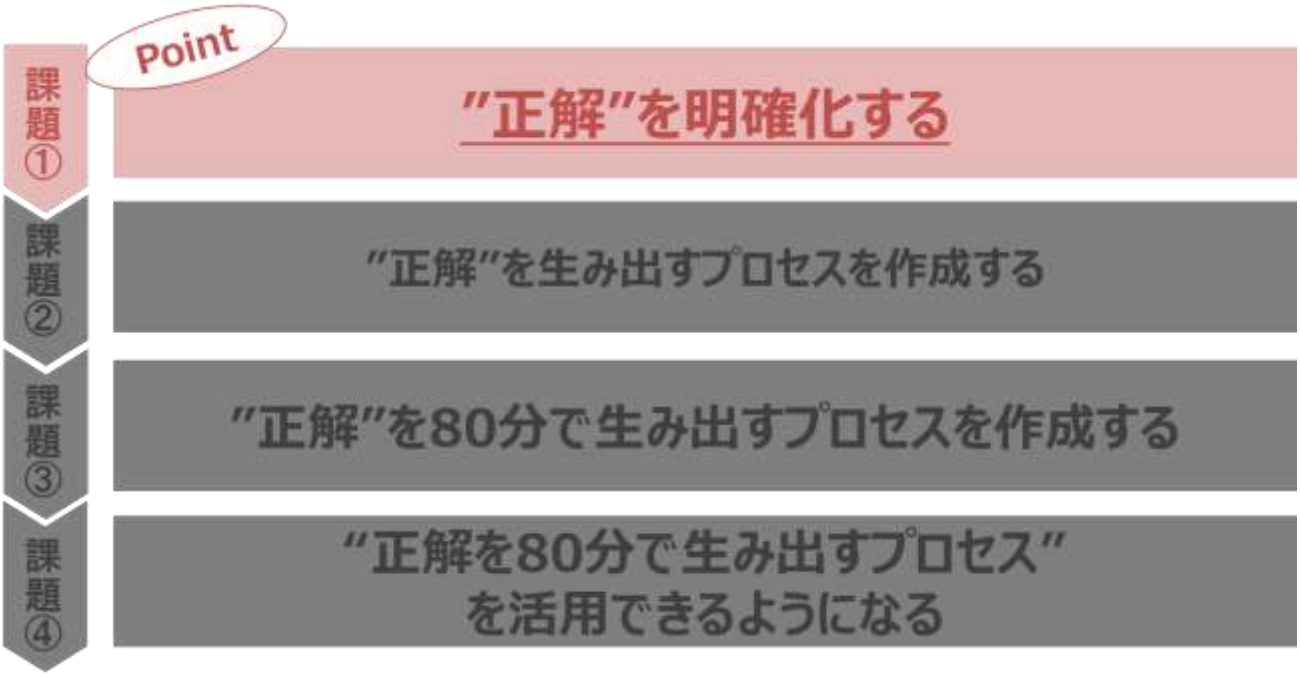
☑ 課題① “正解”を明確化する

2ND



Chapter Ⅱ-1

正解を明確化する必要性

Point

- 2 次試験は一般的な資格試験と異なり、ゴール（正解）が不明確
- 進む方向を間違えると、どれだけ努力しても正解に近づかない
- 正解（ゴール）を明確化し、進むべき方向を明らかにすることが重要
- 採点基準が公表されない以上、完全にゴールを明確にできるわけではないが、おおよその方向は明確にすることが可能

サマリーで説明したように、診断士 2 次試験では一般的な資格試験とは異なりゴールが不明確です。
そのため、進む方向を間違えるとどれだけ努力しても正解に近づかない恐れがあります。

そこで、まずはゴールを明確化し、進むべき方向を明らかにすることが重要です。
採点基準が公表されない以上完全にゴールを明確にできるわけではありませんが、おおよその方向を導くことは可能です。

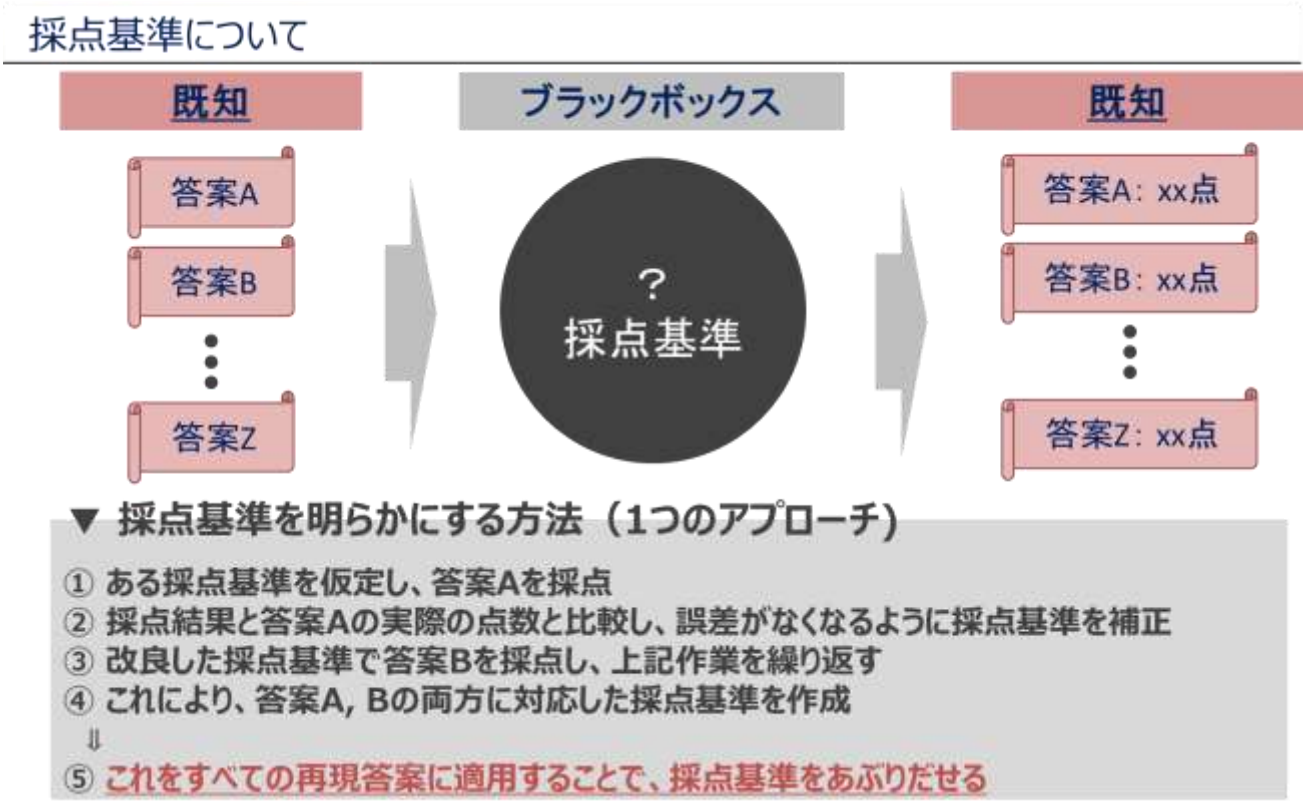
Chapter Ⅱ-2

正解を明確化する手がかり

Point

- 試験である以上、明確な採点基準は確実に存在する
- 診断士協会により採点された答案を用いることで採点基準の明確化は可能

得点開示された再現答案



正解が公表されないとはいえ、試験である以上明確な採点基準は確実に存在します。

中小企業診断士 2 次試験は、合否判定時に合格か、不合格の場合は各科目でＡ～Ｄの判定通知が届きます。さらに申請することにより、得点を開示することが可能です。この特典開示を行うことで、診断士協会が実際に採点した点数がわかっている再現答案を入手することは可能です。

つまり、中央に示す図のように採点基準はブラックボックスですが、左側の過去の実際の答案、及び右側の答案の採点結果は分かっています。この二つの情報を用いることで、中央のブラックボックスとなっている採点基準をあぶりだすことができます。

このために、次のようなアプローチが考えられます。

まず、得点が分かっている再現答案を可能な限り多く収集します。
ここである採点基準を仮定し一つ目の答案 A を採点します。

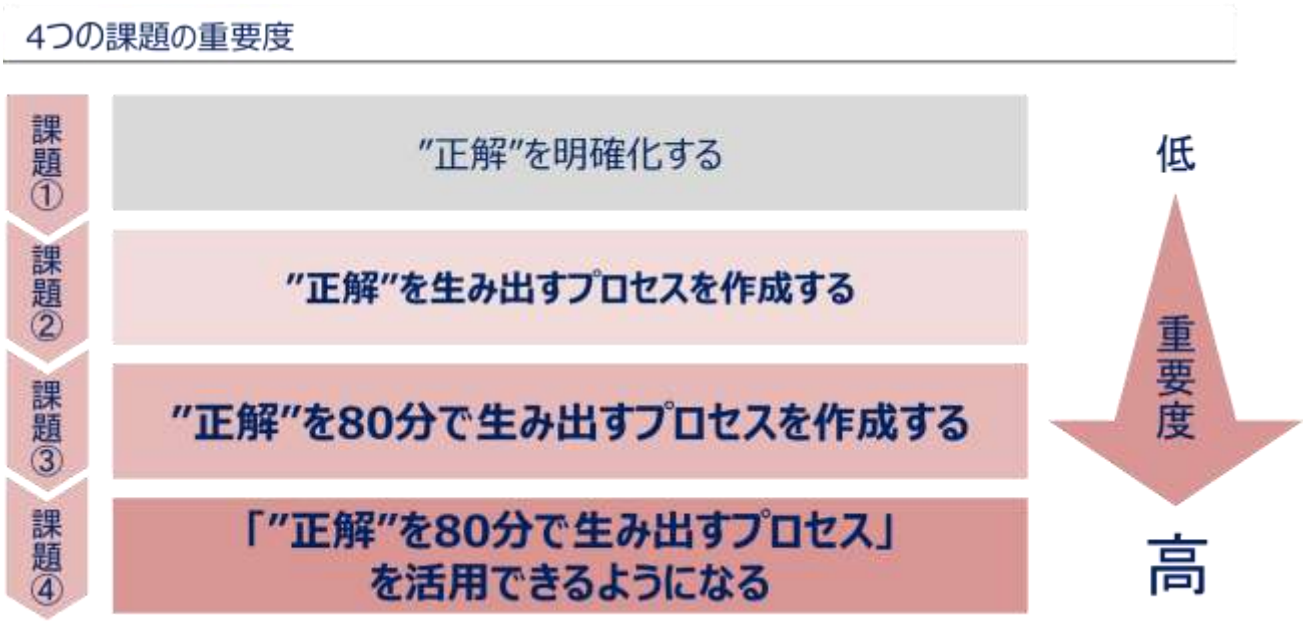
仮定した採点基準での得点と実際の得点を比較し、誤差がなくなるように採点基準を補正していきます
次に改良した採点基準で 2 つ目の答案 B を採点し、先ほどと同じ作業を繰り返します。

これにより、2 つの答案 A、B の両方に対応した採点基準を作成できます。
これを全ての再現答案に適用することで採点基準をあぶりだすことができます。

効率性と重要度

Point

- 目的は合格すること（正解を明確にすることではない）
- 正解の明確化も大切ではあるが、残りの 3 つの課題の方が重要度が高く、採点基準の分析に時間をかけ過ぎるのは本末転倒
- 先述の再現答案の収集・分析を、ふぞろいが人と時間をかけて実施している
- 思惑:自力で分析しなくても、ふぞろいを活用すればいいのでは？



先ほどの説明で、ブラックボックスとなっている採点基準をあぶり出すことができると述べました。

しかしながら、そもそも私たちが中小企業診断士試験を受験する目的は合格することであり、正解を明確にすることではありません。仮に先ほどのアプローチを実際に行うとすると、多大な労力がかかります。

正解の明確化は、もちろん重要です。しかし、試験に合格するという目的に照らし合わせると、残りの三つの課題の方が重要度が高いといえます。そのため、採点基準の分析に時間をかけすぎるのは本末転倒です。

では、どのように診断士 2 次試験の正解を設定すれば良いのでしょうか。
実は、再現答案の収集及び分析を、「ふぞろいな合格答案：同友館（以下、ふぞろい）」という書籍が人と時間をかけて実施しています。そこで、「わざわざ自力で分析をしなくとも、ふぞろいな合格答案を活用すればよいのではないか」と考えられます。

Chapter Ⅱ-3

ふぞろいの活用について

Point

- ふぞろいの精度を確認し、一定程度であればふぞろいを「正解」として活用する。
- 注意点は、「再現答案の誤差（再現度）」と「ふぞろい式採点基準の誤差」の 2 つの誤差が存在すること

ふぞろいの活用前に

ふぞろいで正解を明確化することができるのではないかと述べましたが、ふぞろいを盲目的に信じることはよくありません。ふぞろいを正解として用いることに自分自身で納得しなければ、結局また疑心暗鬼になり砂漠の中を彷徨うことになります。

そこで、課題 1 ではふぞろいを正解として用いることができるのかを確認します。ふぞろいの精度が一定程度であれば、正解として活用できると判断します。これは、次のようなステップで行います。

まず再現答案を収集します。
インターネット上にも再現答案はアップされていますし、もちろん自分自身の再現答案を活用することもできます。勉強仲間から再現答案を譲り受けるのも良いかもしれません。可能であれば A～D ランクの答案をバランスよく収集します。

次に収集した再現答案をふぞろいで採点します。
ふぞろいには採点基準が示されていますが、この採点基準の解釈には個人差が生じます。そのため、他人任せにせずに自分自身で採点することが重要になります。また、この段階で不揃いを用いて採点できるようにならなければ、実際の学習時に、自分自身の答案を採点することができません。今後の勉強のための訓練にもなるので、必ず自分自身で採点するようにしましょう。

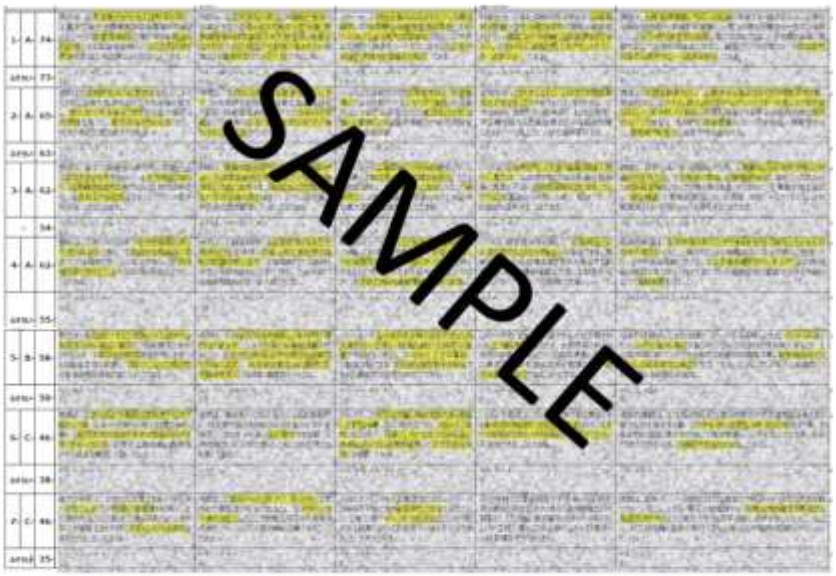
ふぞろいを用いて採点した後に、ふぞろいの精度を確認します。
ここでは再現答案の点数、すなわち得点開示して実際に得られた点数と、ふぞろいの採点基準による点数を比較します。
ここでひとつ注意点があります。それはふぞろいの採点基準の誤差だけでなく再現答案の再現度による誤差があるということです。特にインターネット上の再現答案は、本当にその答案が試験中に書かれたものなのかがわかりません。再現の精度を判断できないのです。

最後に、ふぞろいを正解として活用できるかを判断します
どの程度の誤差まで許容するかは人それぞれですが、例えば+-10 点程度であれば正解として使用可能であると判断します。

ここで重要なのが、ふぞろいの精度を体感的に把握した上でふぞろいを正解として活用するということです。ふぞろいが有効な書籍であったとしても、必ず診断士協会との採点基準との間には誤差が生じます。
この誤差があるということを理解した上で、正解として活用します。

ふぞろいの精度の確認例

判定	得点（開示）	得点（ふぞろい）
A	74	73
A	65	63
A	62	54
A	62	55
B	58	50
C	46	38
C	46	35



ここでは、私がふぞろいの精度を確認した時の例を示します。平成 29 年事例 1 を使用しました。
左の表の得点（開示）と書かれているものが実際の得点になります。そして（ふぞろい）と書かれているものがふぞろいで採点した結果になります。

開示された得点とふぞろいによる得点の誤差は大きくても 10 点程度であり、高得点側の方が高精度と分かります。私はこの結果をもとにふぞろいを正解として活用できると判断しました。

しかしながら、先ほど述べたように採点には個人差が生じます。
そのため、この採点結果を信じるのではなく必ず自分自身で採点することをお勧めします。
これにより、納得感をもってふぞろいを正解として活用することができます。

Chapter まとめ

まとめ

ふぞろいの精度を確認し一定程度以内であることを確認することで課題 1 は達成です。
これだけでも、他の受験生にかなり差をつけたのではないかと思います。

繰り返しになりますが、一つ注意点があります。それは、ふぞろいの採点基準は、診断士協会の採点基準とは完全には一致していないということです。

図に示すように、ゴール、すなわち診断士協会の採点基準の近くにふぞろいが存在していますが、ゴールから少し外れた所にもふぞろいの採点基準は存在しています。これは決して悪いことではなく、正解が公表されない試験である以上仕方のないことです。ふぞろいを盲信することは NG ですが、少し外れている部分もあるということを考慮した上で、ふぞろいを活用するのが良いと思います。
また、もしも「ふぞろいの精度が低く正解として用いることができない」と判断された場合は、ふぞろい以外の方法でゴールを設定すれば問題ありません。

いずれにせよ自分自身でゴールを設定しない限り、論理的には合格に近づくことはありません。
課題 1 を達成したら、残り 3 つの課題に重点的に取り組みます。